

緒言

文化財といえは、世の多くの人達は、とかくこれを過ぎ去つた古い時代のもの、もう今のわれわれにはそんなに役立たないもののように考え勝ちであるが、ほんとうの文化財とは、そんな小さなものではない。それは一つの民族が、それぞれの生活の中から、ほんとうの生きる叫びを何かの形としてあらわしたもので、そこにはまつたく偽りのない生きる喜びがあふれている。したがつて、それ等の文化財は、今のわれわれがこれからどうして幸福な生活を営んでいこうかと考えるための、もつとも好い指針であり、またその規範ともなるべきものである。そして、それはただ詞だけの概念としてあらわされているものではなくて、われわれの直接の感覚にうつたえる造型として伝えられているところに、大きな価値があるものといわなければならないだろう。例えば、一つの建造物にしても、その形なり、その材料なり、その組み立て方なりに、それぞれその土地土地にもつとも適したものが用いられて、はじめてそこにもつとも快適な生活が考えられるといったようなことである。それを如実に示してくれているのが、文化財なのである。これを無視して、今後のわれわれの文化生活などは決してあり得ないといつても、過言ではないだろう。

しかし、この文化財を調査し、研究して、これらを今後のわれわれの文化生活に役立たせることは、なかなか容易な業ではない。まずその調査においては、よほど精確にそのものの性格をつかまなければならないし、次の研究段階においては、それこそ丹念に一つ一つその特性をおさえてからなければならない。そこには当然なこととして、一点のごまかしも許されない。そしてただ歴史の真実だけが要求される。したがつて、文化財の研究とは、華やかな名論卓説を出すことではなくて、専ら努力の積み重ねでなければならない。二年や三年の机の上だけの研究ではなくて、泥と汗とにまみれた十年以上の研究でなければ、何か一つでもものがいえるような成果が期待できるものではない。

奈良国立文化財研究所は、国の研究所としてはまことに貧弱なものではあるが、幸に文化財保護委員会をはじめ、関係各方面の絶大な御援助によつて、小さいながらもそれだけの研究成果を上げているつもりである。しかしまだまだ足りないところは大きい。やはり今後を期待しなければならない。

昭和三十一年八月

奈良国立文化財研究所長

小林 剛